

おもひで

龍野 曉 啓

桂川沿いの土手に、咲き急いだ桜が小雨に濡れて静かに花びらを散らしていた。まだ四月にもなっていないのに「早過ぎる」訃報を受けた時の思いが重なった。

松前先生に初めてお会いしたのはもう二十年以上も前のこと、学部の上三回生の時だった。教材は『古事記』。当時何かにつけものごとを斜めから見ていた私は、回りの空気とは無縁に一人古典大系に目を落としていた。これぐらい、注を頼りにすれば何とか読めるなどと生意気なことを考えていた。

扉が開いて先生が入って来られた。私は、ちらっと目を上げただけでまた本に目を落とした。どうせまた、成立や諸本のことなど、解説を読めば分かるようなことを講義するんだろうと高を括っていた。が、予測は大いにはずれた。『古事記』を読んで一つ一つの言葉の意味を解釈して、これこれのことが書いてますと言ってみても『古事記』を理解したことにはならないわけで……というような話が耳に入ってきた。思わず顔を上げた。「イザナギ・イザナミの国生みの話は皆さんも知っていると思えますけど」——何とか知っていた——「あれなんかポリネシアにも似た話がありまして、グレイが報告したニュージーランドのマオリ

族の神話なんかはよく似てます。こういう神話は元来、天父と地母の結婚によって万物が生まれるという話に属するもので、パウマンなんか随分前に研究してます。」黒板に漢字とカタカナが雑然と記されていく。それから「進化型創世神話」へと話は展開し、またカタカナが増えていった。とにかく展開が速い。次から次と聞いたことのない言葉、人名が飛び出してくる。普段あまりノートをとらなかつた私が、いつの間にか必死になってノートをとっていた。黒板に記される文字はほんの断片で、情報量はその何十倍もあった。講義が終わった。先生は終始楽しそうにお話をされていた。私はそれまで、授業でこれほど疲れたことも、これほど集中したこともなかつた。

何回目かの講義の後、私は自分なりに勉強していたことについて思い切つて質問をしてみようと考えた。相手にしてくれるだろうか、そう思いつつ、廊下を歩きかけておられた先生を呼び止めた。先生はこちらの不安とは裏腹に笑顔で対応して下さった。それに味を占めた私は、その後何度となく質問に行った。随分貴重な時間を割いて頂いた。時には、立ったまま一時間以上もお話をさせて頂いたこともあった。お話を聞けば聞くほど、その膨大な知識量に驚かされるばかりだった。

それから二年後、先生に導かれて大学院に進んだ。それ以降も、公私ともにお世話になった。不肖の弟子を先生は叱咤激励して下さいましたが、その御恩を返せぬまま終わってしまった。

拙いものではありませんが、先生の思い出を手繰る縁にでもなれ

ばと思ひ筆を執らせて頂きました。

最後に改めて松前先生の御冥福をお祈り申し上げたいと思ひます。

合掌

(たつの・あきひろ 本会員)